

万華鏡

ちちいろの霧にまぎれて訪い來たる高雄の里は君のふるさと

神護寺のもみじ老樹の緋の中をけものとなりて石段のぼる

虹たたせ時雨すぎゆく奥山のきつねの婚にもみじ華やぐ

ふと君を奪われそうなかえるでのくれない深く声をうしなう

かぎりなくひかりと光ひびき合い刻を束ねてたつ虹のいろ

霜月のひかり含める細き瀬の水上くらくしづく滝あり

滝しづく音は深山に訝して律師の声明聴くはまぼろし

ことごとく罪もちゆけと一枚のかわらけを投ぐ清滝川へ

秋果ててひと葉ひと葉の影たがう紅葉曼荼羅帰依のよそおい

ほのぐらき御堂の裡は万華鏡 音なき影が無限に怖し

寺に来て信ずる心持たぬまま仰ぐ菩薩の目元穏しも